

私の大東亜戦 白木の箱の思い出

兵庫県 池野 良之助

戦時中のことを聞かされても、戦後六十年、兵隊生活から六十五年も経っています。軍隊手帳等の記録もありますが、年齢も八十五歳、おぼろげな記憶を思い出して申し上げます。地名、日時、事件等不確かな点はよろしくお願いします。

私の軍隊生活は昭和十五（一九四〇）年十二月から昭和十八年十二月まで北支山西省と満州、さらに白紙召集で、昭和十九年夏から終戦まで、内地の淡路島での御奉公でした。

当時、家は農業で家族は父鶴松、母、長男の私と次男、女の子一人の計五人家族でした。

昭和九年中川尋常小学校高等科を卒業、同じ朝来郡竹田町の太田洋家具店に当時の青年学校に通学することを条件に、五年年季の徒弟見習に入りました。徒弟修業は親方の家に泊まり込みで、仕

同級生で早く入隊している人がいて、かげで庇ってくれたので本当に助かりました。

鳥取の十二月は、寒くてこたえました。スコップ一杯程の雪の深さで、毎日の教育、訓練も雪の中ででした。除雪作業も大変でした。三カ月の教育が終わわり一期の検閲も無事終了しましたので、二日の外泊許可を貰い家に帰りました。久し振りの我が家で話も弾みました。

二日の外泊から帰隊するとすぐ北支に派遣されることになり、初年兵、二年兵、三年兵の混成で北支駐屯の本隊に追及、補充されることになりました。

三月十六日、一等兵に進級致しました。北支からの兵員受領には、将校以下曹長、軍曹が迎えに来られました。十六日夜十二時頃鳥取駅から乗車、真夜中でしたが歓呼の聲に送られて出発致しました。途中の各駅でも「万歳、万歳」の声で送られました。

翌朝、広島県呉軍港に到着、輸送船に乗船し呉

事の習熟はもちろん、人間修業も一緒に鍛えられました。

年季が明けて一人前の家具職人になりましたが、ちょうど二十歳で徴兵検査の時がきました。検査結果は第二乙種でしたので、現役の入営は逃れましたが、世は非常時で支那事変の最中、すぐに赤紙の召集令状がきました。

昭和十五年十二月十日、村の氏神様の前で、部落全員の激励と武運長久のお祈りに、決意を述べ、長老区長をはじめ旗の波と万歳に送られて、鳥取歩兵第四十連隊第五中隊に入隊しました。初年兵教育の三カ月、一期の検閲までの苦労は、この部隊でも同様と思いますが大変でした。ことに内務班の規律は酷かったと思いました。内務班の古兵、下士官でも曹長にどやされたと鬱憤を晴らしに初年兵にビンタ。

青年学校と徒弟生活で鍛え勉強していたので、他の人達に比べたら少しは楽だったように思われましたが、それでも毎日腹が減って困りました。

港を出帆、二十日頃北支ターク港上陸、列車で山西省の石家荘、順徳まで行き、それからさらに砂漠のような所をトラックで行き、王官荘に到着しました。王官荘が第一中隊の駐屯地で、私は第一中隊に編入されていました。ここでは、対八路军軍の警備、討伐に当たりました。

王官荘の周囲は馬の背丈程の深さの壕で囲まれ、東西南北に門が四つあって、その門から作戦に出て行きました。王官荘の中央に中隊本部が在りました。中隊長の中村中尉は同じ朝来郡の人だと後日知りました。

―自動車運転教育―

その後、六、七、八の三カ月、中隊から一人自動車運転教育を受けるため石家荘に派遣されました。三カ月の教育を終了し、帰隊して少ししたら今度は浙贛作戦（大作戦）に参加致しました。

石家荘から汽車に乗り、揚子江を現地の小舟で渡り、歩いて歩いてまた歩いて行きましたが、大変な作戦でした。作戦が済んで帰りに浦口に駐屯し

ている時は連隊長当番でしたから少し自由がききました。小山の坂の上の歩哨の所から南京が見えると言うので、早速行って山の上からのぞいて見ました。

当時、南京は我が軍の制圧下にありましたが、その日は南京市街には煙が上がっていません。

それからまた石家荘に帰って来ました。石家荘は大きな石壁の大都会でした。王官荘には別の部隊が替わって入っているので、私達はそのまま石家荘にいました。昭和十七年十月、部隊は満州延吉に移転しました。

— 十月、兵長に進級 —

昭和十八年六月、東寧省の飛行場建設のため各中隊から一人宛選抜され、第一中隊からは私が派遣されました。十二月十日、延吉の本隊に帰りました。十月十日、兵長に進級。昭和十八年十二月二十六日頃、北海道旭川、北部第三部隊（歩兵部隊）に満期除隊のため転属、満期除隊しました。

私は運が良く、人事係がお前あっち行って来

年八月頃でした。三つ年下の妻との見合い結婚でした。

子供は女四人、男一人の五人姉弟で、男の子が末っ子です。家内は三十年前に亡くしました。私が五十五歳で次女を嫁がせて直ぐでした。本当に困りましたが残った末娘と息子が良く頑張ってくれてくれました。

家内は姫路の赤十字病院に入院しましたが、主治医から千人に一人の難病だと言う事で七カ月間、毎日病院に通いました。三つ下の五十二歳でしたが、苦勞しただけで亡くなりました。今まで長生きしてくれたら楽にさせて一緒に幸せな老後をごせたのにと残念ですがこれも因縁でしょう。

今は息子夫婦と孫二人の五人家族で、若い者がやってくれています。孫は一人が大学に、一人が中学に入ったところで、私は気ままに好き勝手な事をやって悠々自適の生活です。私は元来金に縁が無い性分で、今だに金儲けだけはどうにもなりません。

い、今度はこつちと、フリーで、一人炊事に行ったり、運転の教育に出たり、将校当番等と良く中隊から出されましたので、個人としては苦勞が少なかったと思います。

— 除隊後は自営 —

家業の農業と家具木工業も一人立ちしてましたから農業のかたわら木工業もしました。

— 再度の応召 —

昭和十九年夏、今回は白紙召集でした。瀬戸内海淡路島の由良港に陣地を構築する作業でした。敵機来襲で木陰の壕に避難し、去れば作業を続けましたが、ここには砲等は有りませんでした。

昭和二十年八月十五日、玉音放送、終戦、一週間ほど由良港にいて、作業隊の後始末を終えて復員しました。

— 復員後 —

復員後は、家業の農業と家具木工業を兼業して個人経営できました。今は若い者に任せています。私の結婚は第一回の復員後しばらくした昭和十九

今、兵隊生活を振り返って見ましたら、苦勞の無い軍隊は有りませんし、私にも種々と苦勞は有りました。しかし上官、戦友には良い人に恵まれて、割合苦勞が少なかった様に思います。中隊から何かにつけて一人出されました。将校当番とか、連隊旗小隊、自動車教育、飛行場建設とか、隊を離れた勤務がたくさんありました。

一番悲しかったのは、遺骨のお通夜でした。私は四回遺骨のお通夜、お見送りをしました。何百柱とズラーツと並んでいる遺骨に泣けました。鳥取で二回です。かねて覚悟はしていますが、戦場に行けば戦死だと思いました。

北支では二回でしたが、一回目は遺骨列車の岡村大将御参列の御通夜で、大将の直ぐ後ろで一緒にお通夜をした事を覚えています。夜中の午前二時頃だったか寝ていたら叩き起こされて通夜の場に行きました。突然でしたが警備のためか、閣下のすぐ後ろでした。十数両の列車全部が遺骨列車でした。敵を撃って恨みを晴らさねばと思うと共

に、何としても自分は必ず生きて帰らねばと思いましたが。十数両の車で戦友に捧持された白木の箱、捧持する人の顔は忘れることが出来ません。

私は職業の関係で、戦死者が出たら遺骨の箱を拵える役をしました。白木の箱です。寸法は忘れましたが、一人分は大きな箱を一個と、小さな箱四個を作るのです。大きな箱は遺族に帰るもの、後の四つは方面軍とか部隊とか靖国とか分からないが、そうしてくれと言われました。一人戦死したら五個作らねばならないが、よく作られました。多い時は支那の大工を呼んで間に合わせました。

支那の大工道具は鉋は押すやつで、鋸も日本の物と違います。木工業の本職を戦場でこんなことに役立てることなど思いもよらないことでした。

―戦友の死―

やはり隣で一緒に寝起きしていた戦友が死んだら本当に敵を撃ちたいと思います。隣の戦友が行方不明となり、部落に探させましたところ、一週

何回もありました。

戦闘が始まり弾が飛んで来たら「神様、仏様」ですね。人間は弱い者で「南無阿弥陀仏のお念仏」それしか頭に浮かばないですね。重傷で死ぬ間際の人の中にも「殺せ、殺してくれ」と呼ぶ人もいました。どうせ駄目なら苦痛が続くより早く楽になりたいと思うのでしょうか。

戦闘が済んで戦死者の死骸を持って来たら、その遺体を焼かねばなりません、中々大変です。並べて一緒に焼きますが、自分もいつかそうなるのかと思ったら、じっとしてられない情けない気持ちになりました。帰ればすぐ白木の箱作りです。本当に考えさせられました。

戦友が足を打ち抜かれて後方に送られて治療して、二十日程で元気になり帰って来ましたが、ちよほど次の作戦に出るところでした。お前は帰ったばかりだから今回は休んで次まで待てと言われましたが、無理に一緒に行ったらすぐに戦死してしまいました。死神に見込まれたのかと残念で

間ほとして支那人が死体を運んで来ました。衣類等は盗られていて、真っ裸で死臭がひどく、支那人も鼻を覆って来ました。確認のため立ち合いましたが、本当に情け無くて可哀想でした。

戦死の報告は死骸を見て、本人と確認して、中隊長が報告を致しますが、その確認はいつも一緒にいる戦友が行います。私は軽機関銃でしたので、敵からの弾も、一般兵より余計飛んで来たように思います。敵も小銃より機関銃を狙います。

討伐に行っても種々のことがありました。最前線は敵味方入り乱れになります。私も何回(三回)もそばからピストルで撃たれましたが幸い当たらないので助かりました。

一緒に戦っていた隣の同年兵が負傷した時に、一瞬ポーツとするのですかね、急に立ったんです。「お前なにしているんじや、弾が飛んで来るぞ、座らんか」と言って引き下したことがあります。見て見たら腕を打ち抜かれていました。服を裂いて血止めをしたことがありました。この様なことが

した。

私は今日まで怪我もせずには生かして貰っています。運が良い方で、浙贛大作戦中の三カ月は、連隊副官の当番で一中隊から一人、軍旗小隊に配属されました。連隊長、副官、主計将校はいつも一緒に行動しました。当番の私も一緒に回ります。

主計さんは軍票をたくさん持っているのです、大雨の時は濡らしてしまいます。晴れたら乾かす作業をさせられました。軍票の土用干しです。当時は印刷が悪くて濡れたら字が滲んでしまったりしていました。余りにも多いのでお金と言う気が致しませんでした。

軍旗はいつも旗手の少尉さんが捧持していました。歴史の弾の跡で、中の生地は無く、回りの房だけになっていました。夜は本部の又銃に捧げておくのですが、いつも私の銃が使われていました。

考えますと私は常に連隊の最も安全な場所に

たことになりませぬ。私の一生は良い事も悪い事もありませんが何事も良い方に解釈していくようにしています。誰でも苦勞は持っていますから、自分で満足するより仕方がありません。これから今少し元気で、好きな仕事をしながら長生きしたら良い一生だと思います。浙贛作戦で部隊が参加移動した地域は、次の通りですが（中隊誌に依る）私には定かな戦闘の場所、時期等の記憶がありません。

記

揚子江―浦口―南京（津浦線で）

蘇州―杭州 作戦行動に入る。

昭和十七年六月 玉山、常山、建徳、衢州、

九月六日、杭州に帰る。

連隊長（三代目）青木政尚

軍旗小隊 浙贛作戦の軍旗小隊に三カ月、

一中隊から一人（池野良之助）参加する。

遺骨列車の御通夜見送り

石家莊（中隊より自動車習得教育参加中）、

午前二時、駅にて岡村大将外多くの人と共に、
一車両目停車、お通夜、十数両全て白木の箱